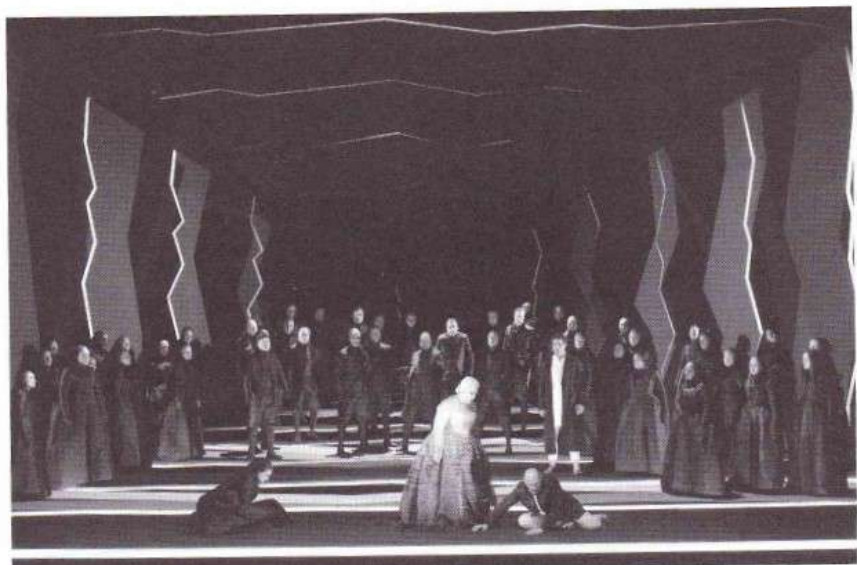


チューリヒ歌劇場で ホモキとバルトリの 初コラボ

チエチーリア・バルトリは個人主義の欧州のなかではめずらしく義理堅いせいにか、アレクサンダー・ベレイラ前総裁がミラノ・スカラ座に移ったあと、アンドレアス・ホモキ総裁の下でチューリヒ歌劇場の新演出に登場することはなかった。そんな彼女が満を持して出演したホモキ演出の新プロダクション、グルック《トリードのイフィジエニー》は2月3日初日、大成功を取めた。

オーケストラ「ラ・シンティラ」を指揮するのはバルトリのお気に入りジャンルカ・カプアーノだが、いつものおどおどした様子がなく、グルックの音楽をドラマティックに引張っていく。

ホモキの演出はミニマムで最大の効果を得意にしていた。マイケル・レヴァインの舞台装置は遠近法を強調した黒いトンネルで、ドラマの進行に合わせてジグザクに割れ目が入り、それだけですべてが表現できる。アガムノンがクリテムネストラに殺され、オレストが復讐するさまがバントマイムで繰り返される場面だけが演劇的で、あとはすべて歌手の表現力に任せていたのも、音楽を際立たせていた。題名役のバルトリは合唱に混じって地味に歌い出したが、アリアになると本領を発揮し、最後まで最大の緊迫感を保っていた。オレストのステファ



意外なことに、チューリヒ歌劇場でこれがホモキ演出とバルトリの初コラボという、《トリードのイフィジエニー》から ©Monika Rittershaus

ルツェルン音楽祭2020 記者会見

昨年11月に勃発したミヒャエル・ヘフリガー総裁のパワーハラスメント疑惑も影響してか、音楽祭側の心を尽くした公見が見られた。パワハラを訴えたのはアカデミーのマーケティンク・ディレクター、ドミニク・ドイバード。そのために音楽祭の経営陣トップが退陣し、音楽祭友の会会長も併せて両ポストにマルクス・ホンクラー氏が就任する挨拶のあと、ヘフリガー総裁と共にその騒動の終結を報告した。続いて、アカデミーを2016年から率いているドイツ人作曲家ヴォルフガング・リームが、47カ国から集まる作曲家の卵たちのための講習や、アカデミー創始者であるブルーレスにちなんで、「ブルーレスの宇宙」と名づけられた企画を紹介した。2022年までの長いスパンで計画されているその「宇宙」は「ポリフェリーX」などの初期の作品に焦点を当てるといふ。

いままでのように、有名アーティストを招聘するスタイルを見直し、世界一の祝祭管弦楽団を自負するルツェルン祝祭管弦楽団を前面に出すため、今年から復活祭音楽祭とピアノ・フェスティヴァルの代わりに、テーマを絞ったコンサート・シリーズを打ち出すと発表した。復活祭音楽祭の代わりに今年は4月1〜4日の「テオドール」がすでにアナウンスされているが、ピアノ・フェスティヴァルの代わりとして、11月20〜22日にバトリツィア・コパチンスカヤ（V）とイゴール・レヴィット（D）がベートーヴェン・イヤールの終幕を飾ると発表された。彼らは以前、室内楽で共演した

こともあり、エキサイティングな3日間となるだろう。

そして「ルツェルン音楽祭の色」を極められるよう夏の音楽祭に集中するという。今年のテーマは「フロイデ（喜び）」。もちろん生誕250周年のベートーヴェン「交響曲第9番（合唱）」の歌詞から来ているのだが、喜びがあらわな様子も模した、色の爆発するプログラムが印象的だ。ベートーヴェンの全交響曲を、最高レヴェルのオーケストラと指揮者が持ち回り演奏するスタイルが今年の売りだ。そのほか「ピアノ協奏曲第1番」をマルタ・アルゲリッチとリッカルド・シャイー率いるルツェルン祝祭管弦楽団がルツェルン・カルチャー・コングレスセンター（KKL）で初共演、「同第3番」をダニール・トリフォノフとキリル・ペトレニコ指揮するベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が、アンネツォフィー・ムターとマンフレート・ホーネック率いるピッツパーダ交響楽団が「ヴァイオリン協奏曲」を演奏する。ほかには、スイス人指揮者のフィリップ・ジヨルダンがウィーン交響楽団を率いて初登場するのもニュースだ。

彼らの目標の一つに、12〜20歳の聴衆を集めたいという野望がある。そのためダンスを前面に出した演目や、「子供のための《フィデリオ》」、ロンドンで成功を取めた「ベートーヴェンNINE」などの企画もある。《第9》の合唱を、みなで歌えるようにゆくりしたテンポでセミクラシク調にアレンジしたものだというのが、その企画に反対意見を唱えるように、リームが「今年のテーマはシユバース（快樂）ではなく、喜びだ。喜びを得るためには、そこに到達するまでの訓練を必要とする」と言及したのが印象的だった。